

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	阿部麻美
論文題目	現代インドにおけるダリトのキリスト教改宗 ータミル農村社会のパライヤルの宗教実践ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、インド南部タミル農村社会におけるパライヤル (「太鼓叩き」を伝統的職務とするダリトのジャーティ) を対象に、現代インドにおけるダリトのキリスト教改宗とはいかなるものか、を考察する。ダリトの日常を取り巻く政治経済や社会環境の変化に着目しつつ、ダリトが宗教実践を通じて紡ぐ世界を、複数のダリト村落での臨地調査をもとに民族誌として記述する。</p> <p>第1章では、調査対象のパライヤルが暮らすタミル地域の各農村の概略を説明する。いずれも近年設置された工業地帯の後背地にあり、独立教会へのダリトのキリスト教改宗が急増している点で共通している。</p> <p>第2章では、タミルナードゥ州の政治経済的な政策の変遷と社会への影響について振り返る。農地改革や緑の革命、留保枠の拡充や福祉政策を検討し、それらがいかに農村社会に影響を与えたのかを考える。最後進階級によるダリトへの残虐行為、それらに起因するダリト運動にも考察を広げ、本論文の射程となる1980年代以降の改宗における時代背景を考察している。</p> <p>第3章では、各調査村で行った戸別世帯調査をもとに、ダリトの就業形態や経済活動の変化を検討する。得られた結果から、ダリトの就業形態は、1980年代から1990年代にかけて年季契約の専従的な農業労働 (アディメーガル労働) から日雇い労働に移行し、農村社会の構造変化が進んだこと、さらに2000年以降は、臨時雇い工場労働や小作農への参入が進むなどダリト世帯の生計手段が多角化していったことを明らかにしている。それに伴い、ダリトの経済機会は格段に向上するが、ダリト世帯間で格差が急速に拡大していることを論じている。</p> <p>第4章では、インド独立後の1950年以降、タミルナードゥにおけるダリトのキリスト教改宗が進展する素地を形成した米国のプロテスタント教派の宣教過程について考察する。これまでダリトは、西洋の宣教師団の提供する経済的恩恵や教育に「魅了」されて改宗する、もしくはカーストに由来する差別や抑圧への抵抗として改宗すると理解されてきた。本章では、宣教師とダリトとの全人的なつながりの重要性などの新たな解釈の可能性について議論している。</p> <p>第5章では、1980年代末から1990年代初頭に生じたダリトの集団改宗について考察する。ある調査村では、ダリトの経済的上昇に伴う支配カーストの焦燥、ヒンドゥー至上主義運動の伝播など農村社会の変動が伏線となり、ヒンドゥー神への供犠儀礼にお</p>			

いて、支配カーストが侮蔑的にダリトの存在を否定したことに端を発し、村落規模の暴動が勃発、ほぼすべてのダリトがキリスト教徒に改宗した。さらに、改宗したダリトたちは既存の教派に参入するのではなく、新たに独立教会を設立し、信仰の基盤を構築した。集団改宗の歴史の描写を通じて、ダリトが既存の社会秩序に異議申立てをするに至った過程が鮮明かつ詳細に検証されている。

第6章では、近年、独立教会がペンテコステ派化している実態を明らかにする。2000年代以降拡大するダリト間の経済格差が在地の死霊言説や邪術への恐れを増幅させている。こうした恐れに対応しうるものとして、ペンテコステ派の実践を独立教会は取り込んでいく。ペンテコステ派化が呼び水となって、独立教会はダリトのキリスト教改宗者を増やしているのである。独立教会は、死霊言説を時に利用し、巧みにかわしたりしながら、他のダリトに先んじて富むことを否定せず、グローバル資本主義の格差による持つ者と持たざる者との分断に対抗する新たな共同性を創出している。

第7章では、聖霊による恩寵の働きを重視するペンテコステ派的宗教実践において、独立教会のダリトたちが、1990年代に「ダリト性（被抑圧性）」の象徴として禁止したパライ（太鼓）の技法を、自らの身体に聖霊を降臨（憑依）させる方法として取り込んでいることを明らかにする。葛藤や苦しみ、焦燥の中で生きる寄り処を聖霊の恩寵に求めるダリトが紡ぐ新たな宗教実践は、パライヤルの身体的な共同性に支えられていることを示唆している。

以上の考察を踏まえ、本論文では結論において、ダリトのキリスト教改宗は、既存秩序への批判を含みこみながら、絶えず変動する世界に自己を位置づけなおし、生きられる世界を共同性のもとで構築しようとする創造的な営為であると定義づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はダリトのキリスト教への改宗について、南インド・タミルナードゥ州の複数の農村における臨地調査にもとづき民族誌的に論じるものである。ダリトのキリスト教への改宗については、経済的利益や教育機会を求めて行われるという見方、あるいは、ヒンドゥー社会での差別に対する抵抗として行われるという見方が広く流布してきた。こうした理解においては改宗の道具性が強調され、宗教性についての考察がおろそかになる。逆に純粹に個人の内面や「彼岸」の問題として論じても、改宗の現実を十分に捉えたとはいえない。本論文は、改宗の“Worldliness (世俗世界性)”を強調するゴウリ・ヴィシュワナータンの議論を参照しつつ、民族誌的記述を通して、ダリトの改宗を、個の内面や彼岸のみに関わるものではなく、既存の宗教や社会関係を再定義しつつ、この世に自らが生きられる世界をつくるような、ダイナミックな営為として描き出すものである。

改宗はインドにおいて政治的に非常にセンシティブな問題である。しかし申請者は調査地の人々と深い信頼関係を築き、かれらの改宗経験の核心に迫るライフヒストリーを聞き取り、1950年代以降の南インド農村の社会経済変化についての貴重なデータを収集することに成功している。

本論文の学術的意義は以下の3点である。

第一に1950年代以降の南インド・タミルナードゥ農村の社会経済と宗教実践の変化の動態について、緻密な臨地調査にもとづいた分厚い民族誌的記述に成功していることである。そこでは上位カーストの下で、アディメーガルと呼ばれる専従的な農業労働に従事してきたダリトの生業形態が時を迫って多様化するとともに、上位カーストとの間に儀礼実践に関わる軋轢が生じる過程が描かれ、また1950年代から宣教活動を行ったアメリカ人牧師夫妻とダリト・クリスチャンの第一世代との間の個人的で親密な関わりや、ダリト独立教会の設立過程、そしてペンテコステ派の影響を受けた現在の礼拝実践が詳細かつ生き生きと描かれる。こうして、改宗は経済的利益追求か政治的抵抗か、といった単純な議論をはるかに超えた、より現実的で奥深い理解への道が拓かれる。

第二に、そのような質の高い民族誌的記述分析を通して、ペンテコステ派の世界的な興隆についての議論に貢献していることである。ペンテコステ派は、聖霊降臨による異言を重視し、恩寵による癒しや現世利益を強調することを特徴とする。その興隆の背景として、新自由主義的な資本主義のグローバルな拡大を通じた極端な貧富の差の拡大があげられ、ペンテコステ派は、社会的緊張によって増大する呪術や妖術に対処する手段を提供するとともに、利己的な蓄財を正当化する根拠を与えているといった解釈がなされてきた。本論文は調査地での事例分析を通じて、確かに現世利益が追求されているものの、そこでは個人的な蓄財だけではなく、財の寄付や移転などを通じて「わたした

ち」すべてが富むことによって嫉妬による妖術を未然に防ぐことが目指され、共同性や連帯が強調されているということを説得的に論じている。

第三は、ペンテコステ派的なダリト独立教会における聖霊降臨の経験を、伝統的な儀礼におけるダリトへの女神憑依の経験と比較しつつ、身体技法という視角から、緻密に記述分析している点である。いずれの場合にも重要なのは、太鼓の演奏とその音に合わせた身体の動きである。儀礼においてパライとよばれる太鼓を叩くことを伝統的な職務としてきたかれらは、1990年代に、それを「被抑圧性」の象徴にとらえ、その演奏を自らに禁じた。教会においてはパライとは異なる片面張りの太鼓が用いられるが、その演奏法には多くの共通点があることが示される。すなわち、グローバルに拡がるペンテコステ的な礼拝の作法と、ダリトの伝統的な身体技法とをつなぎ合わせるような実践を通して、新たな宗教的経験と共同性が生成されつつある可能性を示唆するのである。

以上のように本論文は、1950年代以降の南インド農村部におけるダリトの改宗を、その社会的・政治経済的側面と身体的・情動的側面を有機的に関連づけ、総合的に記述分析することを通して、現代インドの宗教と社会についての新たな理解を示した、きわめて優れた研究である。それは南アジア地域研究および宗教研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。